

メキシコ低地マヤ地域におけるカトリック的宗教文化統合の実証的研究 —マヤ・ユカテカの一カトリック村落マニにおける駆け落ち婚(pudz)を材料として—

A Study of Catholic Culture Integration of Lowland Maya Communities in Mexico
—with Reference to pudz(elopement)in a Maya Yucatecan Catholic Community, Mani (2)—

中別府 温 和

小論の目的は、マヤ・ユカテカの一カトリック村落マニにおける宗教文化統合のあり方を、駆け落ち婚という視点から解明することである。

宗教的文化統合は仮説的概念である。「宗教が文化の中心に位置していて、その文化のある部分を濃く、ある部分を弱く色づけている」と仮説的に考えて、社会を調査し分析していくために作成されている。この仮説に立つことによって、宗教現象の諸特性を時間感覚、空間感覚、社会構造、政治経済的態度などの視点から具体的に分析し、宗教現象の科学的解明を試みる。

本稿では、宗教現象の一つである婚姻を、調査地マニの人々の駆け落ち婚という視点から聴取調査し、宗教現象と貧しさに関わる一側面を解明した。

(1) 駆け落ち婚の頻度の高さ(親の世代62%、兄弟姉妹の世代51%)、(2) 強度の儀礼的形式性(男の家での男と親とのやりとり(「一人で帰ってきたのではない。女を連れている」という慣習的言語表現)、男の両親から女の両親への早々の知らせならびに女の両親による対応(「3日目に再度来訪するように」という慣習的言語表現)、3日目の制裁(「綱での殴打」)・親による許し・結婚の約束、両家族だけによる祝宴など)、(3) 当事者の経済的地位(パルセレーロとミルペーロ)の調査分析の結果、駆け落ち婚が貧しさと関連して継続してきていること、また、この慣習はマヤ的な要素を色濃くそなえていることが明らかになった。

キーワード：カトリック的宗教文化統合、マヤ、奇跡、メン、病気治療

目 次

はじめに—問題の所在—

I マニ村の生態

1 物理的環境

- 2 社会的環境
- II マニの婚姻形態
 - 1 コンパドラスゴと駆け落ち婚 (pudz)
 - 2 駆け落ち婚の具体的事例
- III 駆け落ち婚の内容分析
 - 1 頻度
 - 2 方法
 - 3 駆け落ち婚の儀礼的形式性
 - 4 駆け落ち婚と貧しさ
- IV おわりに

はじめに ―問題の所在―

オスカー・ルイスとエリッヒ・フロムはメキシコの文化を貧しさの視点からとらえる重要な調査研究を行った¹。筆者は両者の仮説的見解をメキシコユカタン州のマニ村で検証する形で調査を進めてきている。調査の過程では、特に、次のような問題点を重視してきた。

オスカー・ルイスは貧しさ (la cultura de la pobreza あるいは la subculture de la pobreza) との関連で、その経済的特徴として無利子の信用借り手段の組織化をはじめ種々の項目を提示する一方で、その社会心理的特徴として集団志向性 (sentido gegaria) の強さ、強度のアルコール依存症 (alcoholismo)、暴力 (violencia) に訴えようとする態度、母中心家族 (las familias centradas en la madre) への志向の高さ、母方親族に対する意識 (conocimiento) の強さ、神父や教会への批判的態度 (criticaあるいは cinismo)、家内聖人像 (imagenes de santos) や聖地巡礼 (peregrinación) や伝統的病気治療への信仰の強さ、現在時点へのオリエンテーションの強さなどを取り出している²。

エリッヒ・フロムの仮説的見解は、オスカー・ルイスの提示した内容と重なり合うものも存在する。ここではフロムの分析的研究の前提となっている操作概念についての言及は避けて、筆者が問題としたい内容の一部を取り上げる。

フロムは66%の非エヒダタリオを社会階層の下層と位置づけて³、社会経済的に中下層にある男子の47%は、性格構造が「受け身で受容的」(pasivo-reseptivo)であることを抽出する⁴。さらにその性格構造が村落の人々のアルコール依存症、暴力や攻撃的態度、外的世界への関心や社会的活動への参加⁵、教会出席⁶、生産様式⁷、運命観、伝統的治療にたいする信頼⁸、母固着⁹などと深く関連し合っている姿を分析した。

オスカー・ルイスとエリッヒ・フロムが貧しさとの関連で取り出した諸見解をマニで検証する

ことは、宗教現象を貧しさとの関連で考えることである。

本稿では、駆け落ち婚 (pudz) を材料として、宗教現象と貧しさに関わる一側面を考察する。そのために、マニの物理的環境、社会的環境を貧しさとの関連でとらえる。ついで、駆け落ち婚の実態を記述する。最後に心身ともに苦痛を伴う駆け落ち婚が、なぜカトリック村落マニで高い頻度で行われているかを貧しさとの関連で論じる。

I マニ村の生態

1 物理的環境

写真1 マニの土地



写真2 石の爆裂



写真3 マニの石垣



写真4 ミルパへの道



マニの属するユカタン州には河川が存在しない¹⁰。15年前までは、人力を尽くして天水を待つ形で農耕を行ってきた¹¹。マニの労働は全て人力である。牛馬が使用されることもない。トウモロコシの収穫時に、路の良い場所に限って、時々馬が運搬の手段に使われる程度である。鋤や馬車は不在である。マニの大地には石が多く、牛馬や機械が補助手段として山地や田畑に入ることは極

度に困難である。マニでダイナマイトの爆音を耳にすることは、少しも珍しいことではないが、村道の整備に爆薬が必要なのである¹²。舗装された幅数メートルの幹線道路から引き込まれた道には、爆裂されるべき大石が多数ある。家の境界、田畑の境界に各々石垣(k'ot)を設けても¹³、石が片付くことはない。

石が鉄棒で砕かれ、ダイナマイトで炸裂されても、マニの土質は変容しない。人々は石の間にトウモロコシと柑橘類を植え育ててきた、と表現しても過言ではない。

常緑喬木、蔓生植物(liana 藤本)、着生植物もまた、石と同様に、マニの農耕を厳しく制約している。マニ周辺の植物群は、数度の伐採で根絶される性質のものではない。年々歳々、開墾のために苛酷な労力を強いられるのが現実である。具体的には、成人男性が、一日1メカテ(20m×20m)開墾するのが通例である。1ヘクタール(10000平方メートル)の開墾には、一ヶ月近くを要する¹⁴。一軒の家を建て、家族を離れて自炊しながらの土地の開墾を、マニの人々は奇異なこととはしない。

石と常緑喬木の大地の開墾に使用される道具は柄が短く、刃渡りの湾曲は振り回す動作を主眼

写真5 マニの農具



写真6 マニの農具



写真7 マニの農具



写真8 マニの農具



写真9 パルセーラの焼畑



写真10 ミルバの焼畑



写真11 パルセーラでの種蒔

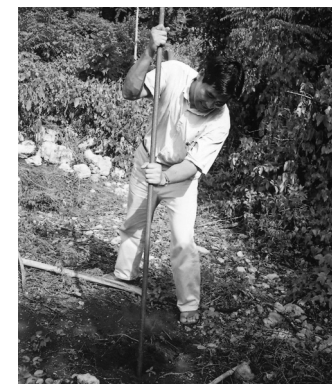


写真12 ミルバでの植付



表1-3 パルセーラで栽培される果物類と平均的収穫

	単位	ペソ	数量	計 (ペソ)	単位	ペソ
ナンセン(ソカのような柑橘類)	1 箱	800～1.000	100	80.000	1kg	100
ミ カ ン	1 箱	500	100	50.000	1kg	25
サラムヨ	1 箱	1.500	100	150.000	1 個	50
キュウリ	1 箱	400	200	80.000	1kg	50
ス イ カ	1 箱	600	100	60.000	1kg	30
ト マ ト	1 箱	800	100	80.000	1kg	50
レ モ ン	1 箱	350	50	17.500	1kg	20
カボチャ	1 箱	600	50	30.000	1 個	20
マンダリナ	1 箱	600	50	30.000		
アボガド	1 箱	600	40	24.000	1kg	50
メ ロ ン	1 箱	800	40	32.000	1kg	50
パパイヤ	1 箱	1.000	30	30.000	1kg	50
マ ン ゴ	1 箱	800	40	32.000	1 箱	50
ハバナ・トウガラシ	1 箱	2.500	10	25.000	1kg	850
トウガラシ(chile verde)	1 箱	1.500	10	15.000	1kg	500
フリホール	1 束	40	60	24.00		
チャーイ	1 箱	600	10	6.000	1kg	100

計 743.900 (1ドル≒330ペソ)

表1-1 パルセーラでの仕事（|は労働 |は植付）

	ナン セン	ミ カン	サ ラム ヨ	キ ュ ウ リ	ス イ カ ト	ト マ ト	レ モ ン	カ ボ チ ャ	マ ン ダ リ ナ	ア ボ ガ ド	メ ロ ン	パ パ イ ア	マ ン ゴ	ト ウ ガ ラ シ	フ リ ホ ー ル
1															
2															
3															
4															
5															
6															
7															
8															
9															
10															
11															
12															

表1-2 ミルパでの仕事（|は労働 |は植付）

	伐採 境 界 づ くり 焼畑	種蒔	除草 消毒 施肥	収穫
1				
2				
3				
4				
5				
6				
7				
8				
9				
10				
11				
12				

マニでは平均 4 haを焼畑にしてミルパを拓いてゆくが、年に 8～10haずつ拓くことができる家族はマニに 6 家族存在する。1 ha当たり500kg～1000kgのトウモロコシの収穫がある。10人家族の食料として年に500kgのトウモロコシが必要である。ミルパでの労働には 1 時間平均160ペソが支払われるが、通例 1 日 5 時間労働で約束がなされる。

パルセーラとミルパでの労働には、表 2 が示すように、教会に関わる行為などと比べて、より多くの経費が負担されねばならない。

表 2 ミルパ、パルセーラ、教会での仕事に要する日数と経費

表2-1 【ミルパ】

	単位	ペソ	3～4 haに要する 日数
伐 採	1 メカテ	500	3 ヶ月
境界づくり	1 メカテ	100	2 ヶ月
焼 畑	4 ha	1, 000	3 ヶ月
除 草	1 メカテ	400	1 週間
種 蒔	1 メカテ	100	1 週間
収 穫	1 メカテ	100	6 人で3 日 (5頭の馬で運ぶ)

表2-2 【パルセーラ】

	単位	ペソ	3～4 ha 要する 日数
伐 採	3 ha	8, 000	1 ヶ月 (1 人)
境界づくり (2 m間隔)	3 ha	1, 500	1 週間 (1 人)
焼 畑	3 ha	800	1 日 (2 人)
除 草	3 ha	3, 000	1 ヶ月 (1 人)
種蒔／植付	3 ha	1, 800	4 日 (1 人)

表2-3 【教会】

	単位	ペソ
洗 礼	1回	500
祝 福 (bendición)	1回	300
ミ サ(日曜日のミサを指定)	1回	500
ミ サ (死者のため)	1回	500
ミ サ (結婚)	1回	1,000
ミ サ (15 歳のお祝い 15 año)	1回	800

男3人／女7人の10人家族であるヒメネス家は、パルセーラの所有面積6ha（うち3haは開拓中）、テレビと軽トラックの所持、成人女子4人のウィピル裁縫による副収入（一着3000～4500ペソ）などの事実から、あるいはコンクリート（床）とパホ（シュロの一種；屋根を葺く）で築造した家（一軒10万ペソ）に住んでいる事実から、経済的には「中の上」あるいは「上」の評価を下しうる家族である。そのヒメネス家は10数種類の柑橘類、果物類をパルセーラに栽培し、年に約74万ペソ（1ドル≒330ペソ）の収入を得ている。

またヒメネス家の場合、48haの山林を年に4haずつ焼畑にし、ミルパにしてい。12年で一巡するが、その時点で木々の生長が十分でない場合、他の山林所有主から借地し、焼畑を行う。1ha当たり平均500～1000kgのトウモロコシの収穫がある。そのうち500kgを家族10人の食料として消費し、残りを1kg≒45ペソで売買する。

マニはヒメネス家をもって一つの典型とする農家が集合した村落である。

2 社会的環境

写真13 家族（6人兄弟姉妹）

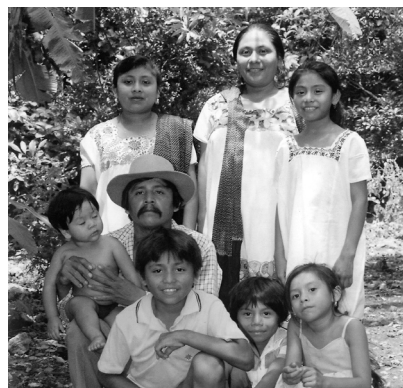


写真14 家族（姉弟）



写真15 子供（従姉妹）



写真16 子供（従姉妹）



1）子供数

マニの一家族平均子供数は、約5人である。妻の年齢が40歳以上の家族の場合は、平均6人となる。子供数7人以上の家族の全体に占める割合は、27％である。現存する家族の親の世代の一家族あたりの子供数の平均は、5.67人を示している¹⁷。

マニにおける子供数の多さは、堕胎の禁の形で信仰によって方向づけられている。マニの女性たちは、自分の体力の続く限り子供を産み育てようとする。姑と嫁の出産が重なることも起る。

子供数の多さが痩せ地の有限性と結びつくと、貧困の問題が生じる。既述したマニの土地の生産性の低さは、ここを移動しないかぎり、漁業や林業への転換の余地を残さない。60代、30代の父親たちは、『自分たちの孫、子供の時代には、土地はない。そのうちマニから何百キロも離れた西南地域や東南地域の山間地(fundo nacional)に行かなければならない¹⁸。そこには車でしか行けない。朝3～4時に出発しないと、日帰りは難しい』と言う。

表3-1 【日 用 品】

	単 位	ペ ソ
トウモロコシ	1kg	40～45
フリホール(豆)	1kg	75
砂 糖	1kg	75
ラード	1 リットル	300
塩	1kg	35
牛 肉	1kg	1,000
米	1kg	150
パ ン	1 個	12
石けん	1 個	30
炭	1kg	50
灯 油	1 リットル	60
タバコ	1 バック	150
ローソク	1 本	25
マッチ	1 箱	10
ニワトリ	1 羽	800
エンドウ豆	1kg	350
鶏 卵	1 個	12～13
トルティーヤ	1kg	65
豚 肉	1kg	800
ベビータ	1 袋	400
下 着	1	200
ワイシャツ(男用)	1	1,000
ブラウス(女用)	1	1,200
ズボン	1	1,500～2,000
スカート	1	1,500
靴	1	1,500～2,500
帽 子	1	800

表3-2 【その他の物品等】

	単位	ペソ
【家屋】		
パホ葺き (10～15 年毎)	1 軒	15. 000
壁塗り替え (10～15 年毎)	1 軒	8. 000
家 (i) コンクリート	1 軒	200. 000
(n) コンクリートとパホ	1 軒	100. 000
(n) パホ	1 軒	40. 000
石 垣		5. 000
【家畜】		
牛 (i) 4～5 ヶ月	1 頭	10. 000
(n) 1 年	1 頭	30. 00～ 40. 000
豚 (i) 10kg	1 頭	8. 000
(n) 90～100kg	1 頭	40. 000
七面鳥	1 羽	6. 000
ニワトリ	1 羽	800
【獲物】		
鹿	1 頭	10. 000
猪	1 頭	4. 000
アルマジロ	1 匹	1. 000
兎	1 匹	1. 000
野生七面鳥	1 羽	3. 000
鳥	1 羽	500
【乗り物】		
軽トラック	1 台	180. 000
三輪リヤカー (トレスィクロ)	1 台	50. 000
テレビ (モノクロ) (カラー)	1 台	30. 000 60. 000
バス代 (10～12km) (マニーオシュクツカブ)	片道	40
タクシー代 (i) 昼 (10～12km)		50
(n) 夜 (10～12km)		1. 000

2) エヒードの売買

写真16 エヒード



写真17 働く子供



旧農業法では、エヒードの売買は禁止されていた。しかし現実には、組合の合意のもとで、エヒードの売買は行われてきている。マニでそれが行われるのは、次の事例のように、病人が出た時、貯金がない家族が即金を必要とする場合が多い¹⁹。

事例 1

エヒードは売ることもできるし、貸すこともできます。病気の時などに、お金がないと、それを売ります。組合の合意 (acuerdo) がないとできませんけれども。自分が働くことができなくなった時に、その土地を貸す人もいます。私たちの場合がそうなんです。私たちは、エヒードの土地を借りています。収穫は全て借り手のものです。土地の世話を全部するのですから、草刈りから収穫までの労働は、骨が折れます。しかし、それをやっていなかったら、土地や果樹はだめになります。特に、灌漑用水 (riego) のない所はそうです。草が繁ると果樹はだめになります。土地は、貸し手のものですが、収穫は全て借り手のものになります。他に支払ったりする必要はありません (33歳・男子・既婚)

事例 2

エヒードは、15年くらいそこで働くと、私有地のように (como propiedad) なります。例えば、家の誰かが病気になって、お金が是非必要な時は、自分のエヒードの半分だけ売ることができるのです。売ると言っても、土地そのものを売るのではなくて、果樹や苗木や果物を市場の相場に合わせて計算し、値段をつけ、そして売ります。それでも病気が治らず、さらに金の必要な時は、エヒードの残りの半分も売ってしまうことがあります。エヒードは、病気の場合は処分 (disponer) できるのです。 (21歳・男子・既婚)

事例 3

私は1.6ヘクタールのエヒードを持っています。相続 (herencia) のためには、分割できます。土地は売ることができませんが、果樹や苗木や収穫は売ることができます。病気の時は、それを貸すこともできます。お金のために売ったりしてはいけません。それは、組合が見張ります。組合の決定がないと、土地を売ったりはできないのです。 (51歳・男子・既婚)

事例 4

私は、1.5ヘクタールのエヒードを持っています。病気の時や近所の人たちとの間でいざこざがあった時は、それを売ります。売ると言っても、土地はエヒードですから、果樹や苗木を売るという意味です。 (24歳・男子・既婚)

3) エヒダタリオとパルセレーロ

写真18 パルセーラの収穫を市場で売買



写真19 裁縫（マヤの伝統衣の裁縫）



マニでは、パルセレーロは全員エヒダタリオであるが、エヒダタリオはパルセレーロとはかぎらない。エヒードの耕作者であるエヒダタリオは、ミルパだけで働く農民であるミルペーロ、パルセーラを所有し耕作するパルセレーロを含む。

マニの土質は上述のごとく痩せているので、土地所有の多少が単純に経済的優劣と相関しない。マニ近辺の土地を10ヘクタール耕作していても、それがミルパであれば、あるいは、灌漑用水の設備なしのエヒードならば、耕作者の経済的地位は低い。ただし、この場合、本人がマニの中心で商業を営んでいたりと、遠隔地に別のエヒードを耕作しているときは例外である。

パルセレーロは、ミルペーロやエヒダタリオと対比すると、明確に経済的地位は高い。井戸（pozo）の灌漑を設置し、天水依存の伝統的農法の危険率を下げ、さらに、多種多様な柑橘類を意識的に栽培することによって収穫の安定を図ろうとする生活態度は、パルセレーロ独自のものである²⁰。

パルセレーロとミルペーロについては、以上の一般的傾向とともに、次の表4のような商業活動を含

表4 マニの副業

	男	女	計
日用雑貨			13
酒屋			2
薬屋			0
トウモロコシ碾			3
パン屋			1
床屋			7
肉屋			4
食堂			1
仕立て職	7		7
大工	2		2
靴（修繕）屋			0
玉突き			1
左官石工	40		40
部品組立工場			1
楽師	(7)		(7)
医者	1		1
鍛冶屋			0
トウモロコシ商人			5
レンガ商人			0
タクシー運転手	5		5
(小学校)教師	7	3	10
神父	1		1
メン(呪医＝祭司)	3	1	4
刺しゅう職人	5	10	15

めて考察する必要がある。マニの日常生活の主体は農耕であるが、土質や耕作条件が良好でなく、生産性が低いので、人々は出稼ぎに出かけ、また、表4のような副業を行って生計を保っている。

4) 奇跡

マニにおける病気治療と奇跡の問題は、特に聖像およびメン（men 呪医＝祭司）との関連で、既に記述した²¹。ヴィルヘン・マリアをはじめ聖像が奇跡の治癒を及ぼす場面では、貧しさあるいは貧しい者は非常に重要な主題であった。奇跡の治癒の事例の中では、「私の家にはお金がなかったので…医者を呼ぶことができなかった」「私は貧しかった。7人の子供がいました。毎年…ニーニョ・デイオス（幼子イエス）に…誓っておりました」のような言い回しで散見される。また、聖像の奇跡との深い関連の中で存続してきており、マニ周辺では最大の祝祭であるカベサ・デ・コチーノ（cabeza de cochino）は、貧困から身を起こし、大事業家になったと語り継がれる男が、その奇跡的飛躍をニーニョ・ディオスへ感謝するところから始められた。この祝祭を構成する重要な部分は劇であるが、劇中で豚を媒介にして展開される男役と女役の卑猥で賑やかな商談は、貧しい二人がそれぞれ大金持ちの愛人を獲得しようとする努力を主題としていた。

マニで病因の一つとなっている呪詛（maldición）も、貧しさを嘲る態度に対して投げかけられる。具体的には、貧しくはあっても働くことができる人が、働こうとはしないで盗みを行うとか、貧しい自分の母親を他人に紹介したくなくて「奉公人」として紹介するような行為に対し呪詛がかけられる²²。

このようにマニの現実の生活は物理的にも社会的にも貧しい状況の中で営まれている。カトリックの信仰はそのような現実の生活の全面にしみ出し、人々の思考と行動を色づけているのである。また、信仰が定着する過程では、土着のマヤ的な要素との対立と受容が展開してきていると考えられる。貧しさと信仰、カトリック的要素とマヤ的な要素の存続と変容という視点から、マニの宗教文化統合の一側面を分析するために、駆け落ち婚を材料として考察を進めていく。

II マニの婚姻形態

1 コンパドラスゴと駆け落ち婚（pudz）

マニのコンパドラスゴの様態を分析するために、教会の史資料を書写した。書写の内容は、洗礼、婚姻、堅信に関する記録であるが、その作業を進めていくと一つの事実に出会う。婚姻に関する史資料が他と比較すると、極端に少ないことである。例えば、1980年から1991年の12年間に、婚姻に関わる記録は100例しかない。年平均約8例である。マニの子供数の多さを考察すると、非常

に僅少である。

マニの一般的な婚姻は、届出までを含めた形式から、民事婚 (matrimonio civil) と教会婚 (matrimonio por la iglesia) に分類される。いずれか一方の形式だけで済ます者もいれば、両方の形式で行う者もいる。

ところで、上述した12年間の民事婚の事例は、363である²³。教会婚を263例上回る数字を示している。マニの村長は、「363も正確な数字ではない」と念を押すが、村役場で受けつけた婚姻届数以上に正確な数字がないのも事実である。263は全体の事例数の約72%を占める。この数字を教会婚との関係で考察すると、当事者がプロテスタントである²⁴、結婚はしたが教会では挙式しなかった、他村の教会で結婚した等の場合が可能性として提示できる。これら3つの事例は、それぞれ興味深い問題を含むが、それはここでは取り上げない。ここで問題とするのは、3つの事例と同様に、72%のある部分を構成する重要な婚姻内容である。その婚姻形態を、駆け落ち婚と称したい。

マニの駆け落ち婚は、マヤ語でプーツ (pudz)、スペイン語でエスカパル (escaparまたは、エスカポescapo) と表現される。この語はマニの殆ど全員が知っており、その語の内容も、人々には周知のものである。

プーツは、若い男女が結婚式を行う前に、あるいは結婚式を行わないことを前提に駆け落ちをすることである。このような婚姻の形態は、マニ以外の社会でも存在しうることであり、形態そのものは重要な問題となりえない。本稿では、マニにおけるプーツの頻度の高さと、その行為の過程に観察される形式性を問題とする。

マニでは58事例のプーツを一ヶ月足らずの期間で収集したが、その内容は当事者が直接語ってくれたものである。その際に、彼らは「マニの結婚の6～8割はプーツだ」とか、「プーツは別に悪いことではない。当たり前のことだ (no es malo, es natural)」のような表現をつけ加える。前者は、プーツの頻度の高さに、後者はプーツを肯定する態度に言及している。これらの発言の検討も含めて、プーツの頻度の高さと、その行為の過程に観察される形式性を分析する。

写真20 マニの家屋

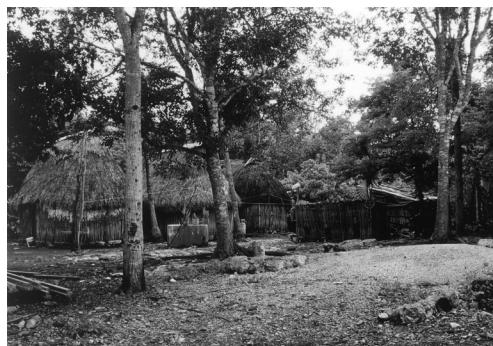


写真21 マニの教会



2 駆け落ち婚の具体的事例

プーツの若干の分析を試みる前に、プーツの具体的事例を記述し、考察と問題提起の材料とした。58事例中、5例を以下に示す。

事例1

私は15歳の時、プーツしました。夫は22歳でした。私がプーツしたのは、私の母が現在の夫との婚約を受け入れなかったからです。なぜなら、現在の夫は大変女たらしで、私は騙されているだけだ、彼は目にする女には誰かれかまわず熱を上げるではないか、というのです。

彼が私と話をするようになった時に、彼が愛している女は私だと、彼が言ったのです。ある日、自分の身を任せるようにと、彼から頼まれました。私たちの若い時は、子供は大人の話聞くことは許されてはいませんでした。彼が好きなのは誰かも知らずに、私は彼の頼みを受け入れました。その後について起こることが、私の人生の調子を永久に変えてしまうなどとは夢にも思いませんでした。

彼は私に言ったこと[自分の身を彼に任せること]に、応えるよう強いてきました。それが受け入れられ、ことが終わると、彼は帰って行くのでした。一ヶ月彼と逢っておりました。いつものように月経があるか、と彼が尋ねるので、ないと答えると、彼の子供を孕んだんだと言いました。[そうだとすると]非常に早く家を出て行かなければならなくなるだろうから、その日の晩にプーツしようと申し出てきました。私が彼とプーツしないなら、彼が他の女友達の中の誰かを求めて行くだろうことは確かでしたし、私が彼の子供を孕んだことを[その時は]保証していても、後になれば私の孕んだ子供に責任を負わないだろうことも確かでした。

私は家で母によく叩かれていましたし、家には食べるものがありませんでしたので、また、彼の家では肉でさえも買ってたべていることが分かっていたので、とりわけ普通の服を着ていましたので、また、私の孕んだ子供の実の父親は子供や娘のために私が切望する食べ物や衣服などを私に与えると約束したのですから、私は彼の申し出を受け入れることをためらいませんでした。さらにつけ加えるならば、彼の子供を孕んでいたのですから。

彼の申し出を受け入れると、彼はできるだけ早く私を迎えに戻ってくると言いました。[その時の]男の声を私の母が聞いたらしくて、私が誰だったのかを母に言わなかったら、母は私をまた叩きました。このことは私には幸いなことでした。と言うのは、母が私を叩いた直後に、私は口笛を聞いたからです。[口笛の主は]私を待っていた彼だったのです。私は、着の身着のままで慌ただしく飛び出しました。母は私は庭で泣いていると考えていたようです。私は家から2区画離れており、山に入り込んだ場所で彼に会いました。家を出たのが7時でしたから、辺りが少し暗くなるのを待っていました。私たちはずっと黙ってそこにおりましたが、彼の家に行くことに決めました。人目につかないように、人一人いない路を通っていくことにしました。人通りの多い路で、私

の祖母が住んでいる付近を横切ろうとした時、母がこちらにやってくるのを見ました。母の腕には、末っ子の弟が抱かれていました。母は祖母の家に向かって行きました。この瞬間に、自分の落ち度が分かりましたが、家に戻れないのですから、どうしようもありませんでした。母が横切るのを待って、それから私たちは走って横切り、大きな路を通り、彼の家に向かいました。彼の家に着く前に、私が言うべきことと私の責任とについて指示を与えるために彼は立ち止まりました。

家に着くと、彼は戸口を叩いて、連れなしで一人で帰ってきたのではないのだが〔女を連れて帰ってきたのだが〕、家の中に受け入れてもらえるかどうかを彼の母に尋ねました。家の中に入るように促され、二人の交際の説明をすると、私が彼の家の者たちより貧しいからということで、彼の母は私を気に入ってくれず、私に向かって怒鳴りました。そして私の義理の父〔彼の父〕は死んでしまっているし自分は病気のだから、どうして私の母を呼びに行かないのだと、彼をも怒鳴りました。

夜が明けるのを待って、朝の7時頃に、彼の母は私が彼女の家にいること、私が私の母の制裁を受けに行かなければならない日取りを知りたがっていることを、私の母に言いに行きました。経済的見込みが立った時に二人が結婚すること、私の母が私たちを3日間待つことで合意が成り立ちました。ちょうど3日経って、先に述べた制裁を受けるために、彼と彼の母と一緒に私の家に行きました。私の家に着くと、母はサンタ・クルスのイマヘンの前で私を訴え、気違い沙汰を起こしてしまったことへの許しを請いました。私の母は自分がクタクタになるまで私を叩きましたが、これは望ましいことでした。私には父がいませんでしたし、父の制裁を受けることがなかったのですから。

この時は、ことはうまく行ったのですが、父親なしで大きくなることは大変つらいことです。服や食べ物やその他沢山のものが不足しますし、とりわけ父の愛が不足します。恐らく父がいなかったために、父の愛をどこか別の所に、つまり、私に不足していた食べ物や服に求めざるをえなかったように思えるのです。

写真22 若い女性たち



写真23 家ではレボソなし



事例2

16歳に3日足らずの時にブーツしました。ホルへは25歳でした。彼はミルパの仕事に、私は家事に従事していました。動機は愛です。

私がホルへと話をしているところを見るたびに、私の両親は私を怒鳴り、叩きました。彼が私より9つ年上だったので、彼は私のおじいさんだ、と言っていました。しかし、私にとって年齢は重要ではありませんでした。私は彼を大変愛しておりましたので、ブーツを決心しました。彼はいつも私にブーツを申し出ておりましたが、それを受け入れることができずにおりました。しかし、私は両親の虐待に疲れておりましたので、その時ブーツを受け入れたのでした。

1984年11月27日、夜の10時頃に、こっそりと家を抜け出しました。しかし、前もって灯は消しておきました。私がアマカ（ハンモック）にいないことを、誰にも気づかれないように。家の外に出ると、彼は家の石垣の後ろで私を待っていました。私たちは彼の家に直行しました。しかし、付近の犬に吠えられないように、ゆっくりと歩きました。

彼の家に着くと、私たちを家の中に入れてくれました。彼の両親は、私たちに忠告をしました。ホルへは末っ子だから、ホルへは彼の両親の家の相続権を所有しているから、いつも彼らと一緒に住むように、彼の両親の家にとどまるように私たちに言いました。私たちはそれを受け入れました。翌日、私の両親に知らせに出かけました。が、ただ私の弟が一人出てきて、私の家の方には何も用事はないこと、三日目に私の両親が私を待っていることを、彼の両親に告げました。三日目に、私が彼と彼の両親と一緒に家に行った時、私の母は私を待っていました。母は一本の新しい綱を買っていました。私が家の中に入ると、母は綱に6つの結び目を作りました。母が私に最初に命じたことは、許してもらうために母の前に出ていくことでした。私がそうしたとき、私を15回叩きました。そして母の許しを得たいなら、母の前に膝まずくように彼に言いました。彼がそうすると、母は私と同じ回数彼を叩きました。その後で、母が私たちにしたことを恨んでいるかと、尋ねました。いいえ、と答えると、というのは母にはそうする権利があるからですが、私を許すと母は言いました。それから後は、〔私たちは〕家に歓迎されるだろうと言いました。それから、私の両親が私たちに忠告をし始めました。そして、彼の両親に向かって、私たちをできるだけ早く結婚させるように頼みました。私たちは、三ヶ月後に、結婚しました。家族の者たちだけで、フィエスタをしました。

事例3

私は13歳になるとすぐにブーツしました。彼は15歳でした。このような過ちを犯した動機は、経済的な打算でした。私は非常に貧しかったのです。私には、服、ドレス、とりわけ食物など沢山の物が不足していました。フェルナンドは、経済的には恵まれた状況にあったので、彼とのブーツを受け入れました。彼の家族は私が貧しいから、私を受け入れていなかったからです。彼は心から私を愛していると言ったので、それではとブーツしました。ブーツという罪(culpa)のために、

私はトイレに行くと言って両親に嘘をつきました。実は、トイレに行くのではなく、フェルナンドとブーツする意図で家を出たのでした。戸口からは出られませんでしたから、石垣を飛び越えなければなりませんでした。戸口から出れば、両親に見つかるでしょうから。石垣を飛び越えて何とかうまく抜け出して、私たちは走って彼の家に行きました。家に着いた時、彼の母は私の挨拶に応えさえしてくれませんでした。この瞬間から、ブーツしたのは間違っていたと分かりました。

彼の両親は、私の両親に知らせに行ってくれませんでした。慣習に従って三日目に、私の両親に会わせに連れていくこともしませんでした。彼は両親に操られていました。人々がそう言っていました。彼は意見が全然差し挟めませんでした。約一ヶ月経ってから、私が家に行った時、私の両親は私を叩きました。そして私を許しました。私が家に行ったことを知らされた時、私は平手打ちを喰わされました。その時から、私の苦しみが始まりました。しかし、これら全てのことにもかかわらず、彼は両親の言うことに耐えつづけておりました。私が子供を産んで、私の状況が変わっていないことが分かった時、彼と別れる決心をしました。子供たちと住むために、一軒の家を借りました。しかし、5人の子供を養っていくのは容易なことではありませんでしたので、別の男と一緒に暮らすことを受け入れました。最初の男とは決して結婚はしていなかったのですから。私は本当に運が悪いのです。同じことを繰り返すことになりました。当初は、大変幸せでした。しかし、時間が経つに連れて、第二の夫はすっかり人が変わりました。私への虐待が始まりました。彼と別れる決心をしました。一人で自分の人生と取り組む決心をしました。このような次第ですから、今日まで、本当の愛が実在するのかどうか分かりません。一度も幸せであったことはありませんから。

写真24 フィエスタ



写真25 巡礼



事例4

私は17歳になるとすぐの時、マルセリーノは19歳の時にブーツしました。彼は畑仕事をしておりました。私は家事をしておりました。私の両親が彼を受け入れなかったので、ブーツしまし

た。私の両親と一緒におりたかったら、マルセリーノと別れなければならない。もし、私の両親と一緒におりたかったら、村の外のどこか別の所に出ていくか、どうかを選ばなければなりません。私が彼と別れるのを拒否しているのが分かった時、私の父はチェトマルの叔父の所へ私をやりました。私は二ヶ月マルセリーノと離れていました。

[チェトマルから] 戻ってきた時、「御変容のキリスト」のために行われるチュマイエルの祝祭が近づいておりました。前夜の踊りにいきました。ホールに入った時、マルセリーノに出くわしました。彼は私に踊りのパートナーになってくれと頼みました。少しずつ、私たちは私の母から遠ざかりました。私は彼をどれほど愛しているか、彼から離れていて苦しかったことを彼に言いました。彼が私にブーツを申し込んだのは、正にその時でした。他に取り術もなかったので、当日の夜に一気にブーツすることを決めました。

踊りが正に終わろうとしていた明け方の4時頃に、踊りのホールから抜け出し、バスの停車場に向かって進みました。最初にビールを一本飲んで勇気をつけました。ビールを飲み終わった後で、マニに来るためにタクシーを賃借しました。マルセリーノの家に着いた時、彼の両親は大変立腹しました。なぜ彼は、いや私たちは厚かましくも私の母を踊りの会場に、とりわけ他の村に置き去りにしたのか、と彼を怒鳴りました。とうに夜が明けようとしていたので、寝るように私たちに言い、彼らは私の母が踊りから戻るのを待つと言いました。朝の8時頃に、彼の両親は私の家に行きました。幸運にも、私の母はもう家に帰って来ておりましたし、私の父はまだ働きに出かけておりませんでした。

彼の両親は、私の両親に話をし、家の中に入るように言われました。私たちの問題を取り扱う段になって、有り難いことに私の父は冷静にその問題を取り扱ってくれました。私の両親が彼の両親を少々侮辱するのではないかと心配しておりましたから。なぜなら、マルセリーノは私の両親の気に入っていなかったことを知っていたからです。私の父の言った唯一のことは、私をすぐに結婚させること、結婚式の後で初めて私を彼の子供として受け入れるということでした。しかし、それでもなお三日目には私は制裁を受けるために私の家に行かなければならない、と言いました。

三日目に私は家に行きました。私の父は私を激しく叩きました。そして、マルセリーノを怒鳴りました。私が自分の結婚のことを両親に知らせに行く日にだけ、私は私の両親の家に入ることができること、それ以前は私に会いたくないことだけを伝えました。私たちはそれに従うことにしました。それから三ヶ月後、ささやかなフィエスタを行うに十分な費用を集めた時に、私の両親を招待に行きました。私の両親は私たちの結婚式に列席してくれました。その時以来、私の両親は私を許してくれました。私たちは私の両親と驚くほどうまくいっておりますし、彼の両親とも受け入れ合っています。

事例5

私が22歳、夫が当時19歳の時にブーツしました。彼と知り合った時、彼は神の御言葉を説くこと

に身を捧げていました。自分の信じる宗教に従って、踊りにもフィエスタにも出かけませんでした。が、私によって彼は変わりました。その変化は、彼が私に示した一つの愛の証拠です。彼は私と連れだって、踊りにもフィエスタにも出かけるようになりました。私たちに必要な物を手に入れるために、それまでより少しは仕事に打ち込むようになりました。私にブーツを申し出るほどまでに変わりました。私は彼の申し出を受け入れるのをためらいませんでした。それ以前にわたしには恋人がいました。が、この男は父の気に入っておりませんでしたので、父はわたしをよく叩きました。たとえその男とブーツしたとしても、彼は決してわたしを本当に愛していなかったのも、私に結婚を申し出ることにはなかったでしょう。もし、彼がブーツを申し出ていたならば、私はそれを受け入れたことでしょう。私は彼が好きでたまりませんでしたので、それを強く望んでいたからです。

私の現在の夫を失うことの怖さから、結婚を待たずしてブーツすることに駆り立てられました。また、私と彼との仲を知った両親の反応を恐れました。前の男のことで両親は私をよく叩いていましたから、同じ事を繰り返すことになるのが怖かったのです。その上、前の恋人がもう少しで結婚しようとしていたところだったので、私に会うのを彼が喜ばなくなりさえすればということもあり、現在の夫が私より年下であったにもかかわらずブーツしました。

彼が私を迎えに来る時間については、二人で既に合意していたので、父に疑われないように、私は早く横になり寝たふりをするために、自分がしなければならない仕事を早めるように努めました。家の者が皆横になったのを見て、私は彼らが寝入るのを待ちました。しかし、上等の服を一着前もって裏庭に運び出しておきました。皆がぐっすり眠り込んだ時に、ほぼ夜の11時頃でしたが、彼の口笛を聞いたので、音を立てないように起きて、服を着替えて、着ていた服は台所に置き去りました。自分の家の戸口を出ると、彼が待っていました。私たちは見つかるのが怖かったので、人通りの少ない方の路を通りました。

彼の家に着くと、彼は入り口の戸を叩き、一人で帰ってきたのではない[女性を連れて来ている]のだが、家に入れてくれるかどうかを両親に尋ねました。彼が両親に私を連れて帰っていることを言うと、彼の両親は、私の両親の反応が怖いので、私たちは決してブーツすべきでないと忠告し始めました。私たちは彼の両親に受け入れてもらえました。

明け方の4時頃に、両親は二人で私の家に行き、私が「ブーツして」彼と彼の家族と一緒に住むようになったことを私の両親に知らせ、何日経ってから私は制裁を受けに帰ってくるべきかを尋ねました。私の両親は、私が持ち去った装身具を返すように要求し、私をできるだけ早く結婚させること、三日待って私に制裁を加えることで彼の両親と合意しました。

三日後に、彼の母に付き添われて、彼と私は実家に行きました。ブーツしたことへの制裁を受けるためです。私の家に着いた時は、大変怖かったです。私の父が私たちを迎え入れた時、私は両親が私を叩くことは価値のあることとしているのが分かり、自分の感じている怖さに借りがあつたことを納得しました。叩かれましたが、両親に恨みは抱いていません。ブーツするべきでな

かったと今では理解していますし、二人の思慮不足のためにブーツしましたが、現在の夫とも非常にうまくいっています。彼は私を大変愛していますし、私も彼を愛しています。

III 駆け落ち婚の内容分析

写真26 家ではレボソを付けない



写真27 外出するときはレボソを付ける



1 頻度

先述したように、教会婚を行わない婚姻数263は、全体の事例数の約72%に相当する。この中には、(1)当事者がプロテスタントである、(2)結婚はしたが教会では挙式しなかった、(3)他村の教会で結婚した等の場合が含まれてくる。ブーツは、男女が結婚式を行う前に、あるいは結婚式を行わないことを前提に駆け落ちすることであるから、(1)(2)(3)のいずれにも関わってくるのであるが、その頻度はどの程度になるのだろうか。

ブーツは統計には載ってこない行為である。だれも自分の結婚はブーツだと言わないし、またそう言う必要もない。しかし、村の人々は誰と誰はブーツしたという事実を知悉しているといつてよい。マニが人口約5000人の小村であり、ブーツは村内で行われてきたことも人々の記憶を支える重要な要因であろう。筆者は人々の記憶をとおしてブーツの頻度を割り出す試みを行っている。ブーツはマニの人々に尋ねなければ、頻度の解明は困難な事象である。それを、マニの全員に聞くことは難しいので、ブーツの事例を語ってくれた58名の人物から、彼らの両親、兄弟姉妹の婚姻がブーツかどうかを聞き書きして、割合を出した。その結果、親の世代は62% (67/107)、兄弟姉妹の世代は51% (280/553)を示した。ただし、兄弟姉妹については、8歳、6歳、などブーツを行うことはない年齢の者も含むので、この世代のブーツの割合は親の世代の数字に近づくことは十分予想される。

ブーツはマヤ語で歌に歌われ²⁵、劇にされ、それらをマニの人々は知っている。一人のミニスト

ロの家族は、親子全員がプーツしていた。マニの人々にとって十分予想できる現象である。父母がそれをしないように子供に予め頼んだりしている(資料NO. 22 中別府1993; 2001参照)。彼らはプーツしようとしているところが判るとも言う。例えば、男女と一緒に歩いている雰囲気とか女子の服装でそれが判ると言われる。女子の服装に関しては、「プーツする時はレボソ(伝統衣イピルを着用する際に肩から腰にかけて装うマヤ風ショール)を家に置いて行くから、女がレボソを身につけていないで男と連れ添って歩いている場合は、プーツだ」がその一例としてあげられる。相手の兄弟にプーツしようとしているところを見つけれ、殴られた事例もある(資料NO. 24)。

「プーツは続く、7(件)まで続く(pudz siege hasta siete)」という表現がマニの人々の人口に膾炙してきた。プーツは誰かが行くと、7件まで連続して起こり、やがて止まる、の意である。この表現を最初に聞いたのは20歳後半の電気技師からであった。その後、多数の人々の確認を得ている。ただし、7が5であったり、そもそも数字が省略されている場合もあった。筆者の一ヶ月足らずの滞在期間中にも5件のプーツが行われた。いずれにしても、この表現もプーツの頻度の比較的高いことを支える一事例である。

このように、プーツはマニにおいては周知の婚姻形態であり、相当度に頻度の高い現象であることが観察される。

2 方法

プーツは単純に平均をとると、男子20歳、女子17.8歳で行われている。女子16歳以下のプーツが全体の半分を占めている。人々の言う結婚年齢(男子20~22歳、女子18~20歳)より若干低い。

プーツには「悪いこと、過ち(error、mal)」(資料NO23:27)という感覚が伴う。プーツは家を脱出するのである。「嘘をついて」(資料NO. 7:23:31)「隙を見て」(資料NO. 9:14:16:22:24:30:)「石垣を飛び越えて」(資料NO. 23:27)「走って」(資料NO. 24:27)「自転車飛ばして」(資料NO. 6:9:10:17:25:27:31:34) 行うものである。通例は人目につかないように夕刻から夜半に挙行される。事例総数の85%が夜闇をついて行われ、その場合も「人通りの少ない路を選んで」(資料NO. 1:2:7:8:15:18:19:35)、「何事もないように進まなければならない」(資料NO. 5:16:28)。

プーツは男が申し出る。日時を合意し合うと、男が相手の家の近くで待機する。日時の合意ができてない場合には、「口笛」(資料NO. 1:2:15)や「動物の鳴き真似」(資料NO. 6)を合図に、女子は家族の者に気づかれないように家を抜け出す。18%の事例がフィエスタの踊りの晩に起こっている事実も興味深い。マニの若者も、「(8月下旬にマニで行われるヴィルヘン・アスンシオンの)フィエスタは(プーツには)絶好の機会だ」と言い、「一昨年(1990年)、5か6、昨年(1991年)、7か8のプーツがあった」と教えてくれた。フィエスタはプーツの機会でもあるのである²⁶。上記の例より突発的な事例も存在する。例えば、昼間買い物に出かけた際、相手に会ってそのままプーツしたり(資料NO. 13:25:29)、広場で出会いその場でプーツを申し込み実行する事例(資料NO. 28:35)

もあるが、そのような方法を取る場合でも、事前にプーツのことは十分に話されている。

プーツした二人は、殆ど例外なく男の両親の住む家に行く。そこで、男が家の外から、両親に対して「一人で帰って来たのではない、女を連れている」という表現で、プーツして帰ってきたことを告げ、両親の対応を求める。この呼びかけへの両親の対応について取り上げるべき内容は、激怒の反応が一例(資料NO. 21)だけであるという事実である。他に一例両親が立腹した事例があるが(資料NO. 14)その立腹はプーツそのものに向けられたのではなく、「親を(他の村の)踊りの会場にほったらかしてきた」ことへの義憤であった。

男の親は激怒しないが、最初家の中に入れようとしなかった事例は3例ある。1例は、「プーツを取りやめるように」忠告し(資料NO. 1)、1例は長男の取りなしがなされ(資料NO. 17)、1例は息子の呼びかけに「母親がまったく応えてくれない」(資料NO. 23)のものであった。

男の親は激怒もせず、家へ入ることを拒否することもなく、二人を家の中に招き入れる。しかし、親が家の中に二人を入れたことが、プーツの承認を意味するのではない。親が二人の意志を確認したり(資料NO. 3:12:20:33)、プーツの取りやめを勧めたり(資料NO. 1:15:33)することも行われる。これらのやりとりがなされた後、男の親は相手の親に知らせに出かける。これをやらなかった例は2例だけである(資料NO8:23)。同日、すぐに知らせた事例が42%であり、翌日の場合が同じく42%、一週間後が3件となっている。翌日に知らされた場合でも、プーツが行われたのが全て夜の7時から夜半2~3時までの間であることと、親は現実には翌朝早々4~8時の間に知らせに行っている事実を踏まえると、プーツはできるだけ早く女の方の両親に知らせることとなっている。知らせる行為がなされなかった2例は、いずれも不幸な結果を招いている。資料NO. 8の場合は男の親は相手の親に告発され、村役場で村長を介して調停が行われようとしたが、功を奏さず、破局を迎えた。資料NO23の場合は、双方の親同士が連絡を取り合うことが遂になく、女は5人の子供を出産後、男と離別し、まもなくして別の男と同棲したが、それも失敗に終わった。

プーツの知らせは男の両親が行う。母親だけでこれを行う例が4例あるが、これらの場合は、その家族に父親が不在である。既述したように、プーツはできるだけ早く知らされなければならないので、男の親は二人そろって女の家に出かけ、娘が自分の家に逗留していることを知らせる。この行為に対する女の両親の対応は、60%が以下のような形をとっている。男の両親に向かって、二人をできるだけ早く結婚させるように、また、3日目に男の両親と当事者二人そろって女の親の家に来るようにと二つの依頼をするのである。そもそも親同士の面談が成立しなかった2例(既に取り上げた資料NO. 8と資料NO. 23)を除くと、5例がこの段階で面談を拒否され、物別れの状態が現在まで続いている。

3日目に男の親と当事者二人が女の親の家を訪れる場面では、40%の割合で当事者二人が親によって叩かれている。60%の当事者たちは、叩かれていないが、ここで重要なことは、本人たちは全員「叩かれると思っていた」という事実である。「私は叩かれるために帰るのだと考えておりました」(資料NO. 24)。親が叩く場合は、綱(soga)に6つの結び目を作り12回叩くのが一般的と言

う。しかし、58例中5例は平手打ちによるものであった。

3日目には、特に殴打の後には、「できるだけ早く結婚するように」と親が二人に言い渡し、結婚への取り組みや日取りなどについて話し合いがもたれる。「私の親が唯一欲したことは、できるだけ早く結婚することでした」(資料N0. 24)。全体の68%がその後3～6ヶ月して、結婚のためのフィエスタ(fiesta pequeña)を男の家で行っている。他の人々は、「自分の落ち度が分かりましたが、家にもどれないのですから、どうしようもありません」(資料N0. 22)「両親は折り合っておらず、兄弟たちとも話もできない」(資料N0. 4)「二人とも結婚していない。ノビオは別の女性と同棲し始めました」(資料N0. 22)「本当の愛が存在するのかわからない。一度も幸せであったことがありません」(資料N0. 23)のような生活苦の中にある。

3 駆け落ち婚の儀礼的形式性

マニの駆け落ち婚は強度の儀礼的形式性を含む事象である。その内容を記述すると、①男の申し出・日時の設定、②夜半・女の家付近で待ち合わせ、③女の家からの脱出・男の家への逃散、④男の家での男と親とのやりとり(「一人で帰ってきたのではない。女を連れている」という慣習的言語表現)、⑤男の親による二人の容認、⑥男の両親から女の両親への早々の知らせ、⑦女の両親による対応(「できるだけ早く二人を結婚させること」「3日目に再度来訪するように」という慣習的言語表現)、⑧3日目の制裁(「綱での殴打」)・親による許し・親による忠告・親による結婚の相談と約束、⑨3～6ヶ月後の両家族だけによるささやかな祝宴、のような形をとる。

この儀礼的形式性は既に検討した駆け落ち婚の頻度の高さなどどのように関連し合っているのだろうか。既述したように、この形態の婚姻をした当事者の68%は、「うまくいっている」「今は幸せな生活を送っている」と話している。しかし、プーツは心理的にも肉体的にも苦痛を伴うものであった。「プーツは(本来は)やるべきではない」(資料N0. 1)行為であり、通例「クタクタになるまで(綱で)叩かれる」(資料N0. 2)制裁も受けなければならない。愉快地気軽にできる行為ではない。そのような行為がなぜ上述のような儀礼的形式性に沿って、頻繁に行われるのか。この問題に貧しさという視点から接近してみたい。

4 駆け落ち婚と貧しさ

プーツの理由として、実際に本人があげる内容は、「親の虐待」(資料N0. 1:2:3:10:18:19:20:26:31:32:35)が比較的多い。この虐待は、資料N0. 2:3:20:26:31のように、親が子供の恋愛関係(noviazgo)を認めないことに大部分起因しているものもある。恋愛関係は認めてもらえない、殴打はされる、そこでプーツに訴える。確かに、「宗教の異なり」(資料N0. 4:23:34)や「品行や人柄の悪さ」(資料N0. 5:14:15:28:30:33)などを理由に親が子供の恋愛関係を認めようとししない事例

まで含めると、子供の側から見た「親の無理解」はプーツの理由として20例を数える。本人が直接示す理由としては、非常に重要であると考えられる。

しかし、「親の無理解」だけでは、プーツの頻度の高さと強度の儀礼的形式性は理解が困難である。この視座を支持するに思える一事実が教会の婚姻資料の中に存在する。1970年から1989年の20年間にわたる婚姻資料には、310の件数について両人の名前、両人の両親の名前、両人の代親(コンパドラスゴ)の名前に加えて最後にbodaかlegitimaciónの記載がある。このlegitimaciónの記載が加えられた婚姻は、実はプーツ後3～6ヶ月を経て教会で挙式した形態を意味している。この形態が310の総数に対して占める割合は、207(約66%)である。この比率は、プーツ当事者の家族のメンバーを材料にして割り出したプーツの頻度(親の世代62%、兄弟姉妹の世代51%)に極めて近い数値を示している。兄弟姉妹の世代には、既述したように、プーツしようにもできない幼児を含むので、教会の婚姻資料とプーツ当事者の親の世代(無論、この世代には教会で挙式していない者が含まれる)の婚姻形態から引き出したプーツの頻度は62～66%となる。これだけの頻度に達し、かつ心理的、肉体的に相当な苦痛を伴い、さらに強度な儀礼的形式性を有するプーツが、「親の無理解」だけを主たる理由として生起しているとは考えにくい。物理的環境、社会的環境、エヒダタリオとパルセレーロの項目のもとで、マニ村の相対的貧しさについては言及したが、それとの関連でプーツの頻度の高さと儀礼的形式性の考察を試みたい。

「貧しさ」をプーツの直接および間接の理由として示した事例は、資料N0. 2:5:6:9:19:23:25:27の8例である。マニでプーツに関して聞き取りを行う際に、「結婚の費用」について十分なやりとりをしておれば、この数値が動く可能性は残っている。ここでは、エヒダタリオとパルセレーロおよび土地所有を材料として考察する。

マニにおいては、「わたしはエヒードを所有し、耕している」と「わたしはパルセーラを所有し、耕している」という二つの表現は、明確に農耕に従事する者の農産物の生産能力の上下を表しうる言語慣習である。既に述べたように、後者の方が前者よりも成功しており、収入も高い²⁷。パルセレーロに関しては、数年のパルセーラの耕作者なのか、10年以上のパルセーラの耕作者なのか、あるいは、井戸付きのパルセーラなのか、井戸なしのパルセーラなのか等の区別が必要であるが、ここではそれらは取り扱わない。58例中男の側に土地無しが19、エヒダタリオが17存在し、全体の約62%を占めている。マニでは最も経済的に恵まれない人々である。エヒダタリオを含めた土地所有者のうち、男側(エヒダタリオ)＜女側(パルセレーロ)のように、土地所有者でありながら男側より女側が経済的に優位を占めている例は、全体の22%(22例)を占めている。さらに、男側(エヒダタリオ)＝女側(エヒダタリオ)のような形は、25%(15例)となっている。これらの事実は男側の経済的貧しさを指摘するものと思われる。マニにおける婚姻は、男側の申し込み・男側から女側への金品の授受・男側の負担による結婚式・夫方居住のように男側が主体となって組み立てられていく。したがって、男側の経済的地位が婚姻の形態と深く関連するのである。

プーツ後3～6ヶ月を経て、身内だけでささやかな祝宴を開く形態については既に言及したが、

この期間はプーツと関連するこの祝宴の経費を用意するための猶予なのかもしれない。この祝宴のためには、1羽の七面鳥、数箱の飲料水とビールを用意するだけで、音楽も新しい礼服もない。

IV おわりに

神父はプーツを「あれはよくない (es malo)」と言い、プーツした者が教会婚の申し出に来ても即答をしようとしなない。その時の会話は小さな声で、消極的な態度を伴いながら進行する。「彼らはプーツした人たちです。私はプーツした人たちが教会で式を挙げたいといってきても、すぐに許可はしません。少なくとも半年くらいは二人の様子を見守ります。本当に結婚する気があるのかを確認するのです。結婚する気がありそうだという時にだけ、結婚式を行います。プーツのようなやり方はいけないことです。マニの大概はプーツです (la gran mayoría es pudz)」

神父の発言にはカトリック的な要素とマヤ的な要素が複雑に絡み合ってマニの人々の思考と行動を色づけている一面が表れている。カトリシズムは伝播の過程で土着の宗教、社会、文化と接触し、受容と対立を繰り返しながら宗教文化複合を定着させてきた。低地マヤ地域の一カトリック村落であるマニでも宗教文化複合としてカトリシズムは人々の現実のすべての面に浸透しているのである。

貧しさはカトリシズムにおいて重要な意味を持っている。マニにおいては奇跡が貧しさと深く関連しながら生起している。耕作可能な土地は極めて限定され、その土地の耕作条件は最悪であり、新開拓地の可能性はほとんどない状況の中で、人々は特別な事情のない限り子どもの数を減らそうとはしない。多くの子どもたちと土地を共有して生産し、また、出稼ぎをして生計を立てていく。

駆け落ち婚はその方法においてマヤ文化を継承しながら、他方ではカトリック文化の中で貧しさと関連し合いながら、両者の複合体として存続変容してきているのである。

謝辞

マヤ語からスペイン語への翻訳にはマニのパウリーナ嬢に援助をいただいた。また、プーツの事例を収集する際には特にエウラリア家の人々に協力を賜った。記して深謝の意を表したい。

筆者は、1983年以来取り組んできているマヤ・ユカテカの一カトリック村落マニにおける調査研究を、『メキシコ低地マヤ地域におけるカトリック的宗教文化統合の実証的研究』(日本語)ならびにA Study of Catholic Culture Integration of Lowland Maya Communities in Mexico (英語)と題して再考と集大成を行っている。本稿は、その一部をなすものであるために、内容の一部が既に公表(論文および学術大会での口頭発表)したものと重複する部分があること、また、その部分については、引用参考文献に明示することによって責任の所在を明らかにしていること、を予めお

断りしておきたい。

(1)OSCAR LEWIS.1982.Los Hijos de Sanchez.Grijalbo.Mexico.

1969.『サンチェスのこどもたち』上下 柴田稔彦 行方昭彦訳 みすず叢書

ERICH FROMM. 1970. Sociopsicoanálisis del Campesino Mexicano.Fondo de Cultura Economica. México.

(2)OSCAR LEWIS、op.cit., pp.16-17.

(3)ERICH FROMM、op.cit., pp.93.

(4)do., p.221.

(5)do., p.216.

(6)do., p.216.

(7)do., pp.179-180

(8)do., p.221.

(9)do., pp.179-180

(10)マニで井戸を掘る場合、50m～70mはごく普通のこと、中には100mの井戸もある。マニに Agua Potable (飲料水) が設置されて7年が経過したにすぎない。

(11)1978年以来、組合形式でpozo (灌漑用井戸) を設け柑橘類を栽培し始めた。それまではトウモロコシを作っていた。今でもマニの家々に垣間見られるch'il (トウモロコシ保存用のパホ製倉) は、その一つの象徴である。

(12)50～60cmの穴を大きな石にあけて、そこに導火線を入れて爆破する。井戸を作る場合もこの方法がとられる。

(13)田畑の境界に石三つを三角形になるように置き、その上にさらに一個の石を重ねて作る境界をsukと呼ぶ。

(14)開墾は伐採・境界づくり (2 m間隔)・焼畑・除草を含む。ミルパの場合は焼畑・種蒔きで収穫が見込まれるが、パルセーラの場合は7、8年～10年間は収入が殆どない。

(15)地図を参照すると、マニの中心付近にかなりのエヒードは存在するが、石を含めた自然条件の悪さのために殆ど利用がなされていない。

(16)マニにおいては、石が多いために、樹木が大木になりにくい。「焼畑は大木を風の力を借りて、短時間の間に焼くほど良い。が、ここには大木も育たないし、たとえそれらがあって燃えたにしても30～40cmぐらいしか堆肥として溜まらない」と人々は言う。

(17)拙論「マニにおけるメン (呪医 = 祭司) と儀礼慣習と擬制的親子関係 (PADRINAGO・COMPADRAZGO)」、1989年 130頁 参照。

(18)tierra nacionalとも呼ばれる。マニにはない。誰がどのように使用してもよい。使用面積にも制限はない。誰に対しても自由な土地である。マニの人々は、ミルパ作り、売買用の薪取り、鹿討ちなどを目的にここに出かける。例えばJuntochacのように、この土地がエヒード化

し、そこに村落が形成されたりもする。

(19) パルセーラの組合長でさえ、妻が病気し、隣接村落の医者に4～5日連続してかかった時、他人から借金の工面をしようとしていた。「貯金はどこにもしていない」と言っていた。

(20) パルセレーロ的な生産様式については、拙論「ユカタンの一村落マニにおけるメン(呪医＝祭司)と雨乞いの儀礼(cha'chac)について」、1987年 227-228頁、250-251頁参照。

そこでは一人のパルセレーロが15種類の果物や柑橘類を栽培し、年中収穫が絶えない生産方法を自覚しながら生産に従事する姿が記述されている。パルセレーロとは対照的に、エヒダタリオの生産方法は生産期間が8～11月に集中し、生産者の種類も果物に限定され、その量も市場で換金できないほど極めて少ない。

(21) 拙論「マヤ・ユカテカ地域の一村落マニにおける聖像と病気」1991年特に91-112頁参照。

(22) do., 115-117頁参照。

(23) 1980年から1991年までを順次示すと、20/36/28/32/42/34/30/27/32/34/31/17となる。

(24) マニでは、Sabatista、Testigos de Jehova、Presbiterianoが存在し、現在約500名の信徒がいると言われている。

(25) マニで収集したプーツの歌は下記の通りである。

in wet xchupil

uye in wet chupil	ay in jajaldios
tiolech jajaldios	seten suc cachten
qui vyeet u tan	in wukic chucwaj
le max yacunt quech	yetel maloob waj
mu bin vehul tech	belay in jajaldios
le baax uch tu ten	tac kop quinmakic
tiolaj pudziquen	tiolaj in toc waj
tu pach juntuul yaax ex	tu lugar caf?
ay in jajaldios	seten suc cachten
chen tel u sastal	in jojsaj kiwic
quin mama lajtal	sen maloob in nok
tu lugar u kul	sen quiboc in boc
cu caxtal in chuj	belai in jajaldios
cu lechel tincal	desde nach quin tal
quin tuxtal ichcol	quin bet caj jesin
con pac wa con si	yetel in cuch buds
cache in jajaldios	

(26) 「プーツは土曜日にも多い。両方の親の相談が日曜日に行われるから。」という人たちもい

メキシコ低地マヤ地域におけるカトリック的宗教文化統合の実証的研究—マヤ・ユカテカの一カトリック村落マニにおける駆け落ち婚(pudz)を材料として— (中別府温和)

た。曜日について確認することをしていないが、後述するプーツの儀礼的形式との関連で意味をもちうると考えられるので今後の一課題としたい。

(27) 拙論「ユカタンの一村落マニにおけるメン(呪医＝祭司)と雨乞いの儀礼(cha'chac)について」

1985年 251頁参照。注(5)で示した固定的年間収入はマニでは経済的に上であるが、パルセレーロの典型的な姿である。このような固定的で比較的安定した農産物による収入はエヒダタリオには期待できない。

引用参考文献

中別府 温和

1985年 「メリダ周辺地域マニにおける「熱い」／「冷たい」二分法とメン(呪医＝祭司について)」『南部メキシコ村落におけるカトリック系文化の研究(Ⅲ)』pp. 339-377

1987年 「ユカタンの一村落マニにおけるメン(呪医＝祭司)と雨乞いの儀礼(cha'chac)について」『南部メキシコ村落におけるカトリック系文化の研究(Ⅳ)』pp. 225-254

1989年 「マニにおけるメン(呪医＝祭司)と儀礼慣習と擬制的親子関係(padrinazgo-compadrazgo)」『南部メキシコ村落における宗教と法と現実』pp. 129-150

1991年 「マヤ・ユカテカ地域の一村落マニにおける聖像と病気」『比較文化研究』10輯 pp. 91-123

1993年 「マヤ・ユカテカの一村落マニにおける婚姻形態について—駆け落ち婚(pudz)の事例を中心に—」『比較文化研究』15輯 pp. 123-149

1995年 「マヤ・ユカテカの一村落マニにおける儀礼的親子関係」『地域総合研究』5号 pp. 53-64
『マヤ・ユカテカの一村落マニにおける奇跡について(1)—メンの病気治療の事例を中心に—』『比較文化研究』17輯 pp. 111-152

2007年 「宗教の太古性と残存性に関する一考察—マヤ・カトリック村落マニにおける口頭伝承を材料として—」『宮崎公立大学人文学部紀要』第15巻第1号 pp. 195-232

Harukazu NAKABEPPU

1996 *The Structure and Function of Ritual Kinship in a Maya Yucatecan Catholic Community, MANI.*

Bulletin of the Center for Regional Studies. Vol.6 pp.77-96

2001 *Marriage Form in a Mayayucatecan Catholic Community, Mani— with special reference to Pudz—*

Bulletin of Miyazaki Municipal University Faculty of Humanities. Vol.8 No.1 pp.205-220

- 2002 *Some Aspects of Social Structure of a Mayayucatecan Catholic Community, Mani.*
Bulletin of Miyazaki Municipal University Faculty of Humanities. Vol.9 No.1
pp.137-152
- 2002 *Ritual Kinship and Ejido in a Mayayucatecan Catholic Community, Mani.*
pp.228-233